科目区分：学校教育実践コース（国語教育専修），国際理解教育コース
授業科目名：日本語概説

「日本語概説」授業評価報告

所属講座：国語・氏名：佐藤栄作

１．授業の概要

平成２０年度より総合人間形成課程がスタートした。「日本語概説」は、これまで通り学校教育教員養成課程においては国語免許の必修科目であるが、新たな総合人間形成課程における課程必修科目となった。従来の情報文化課程においては、国際理解教育コースの選択科目であったから、大きな位置づけの変化といえる。情報文化課程では、「情報化時代の言語文化」が課程選択必修科目であったが、課程の改組とともに、これを廃止し、人間形成に深く関わる言語についての入門にあたる科目として、「日本語概説」が抜擢されたのである。

本年度の授業評価報告は、国語教員としての必修科目としての「日本語概説」、人間形成の基盤としての母語を扱った「日本語概説」という二つの顔を持つ本授業（同名の二授業の合併）が、それぞれの目的に叶うかたちで成立しえたのか否かについて吟味し、次年度以降の改善点を明らかにしたい。

（１）授業の目的

学校教育の「日本語概説」の目的は、「小学校教員、中学校・高校の国語科教員として理解しておくべき日本語の概要を学ぶ。」であり、総合人間形成課程の「日本語概説」は、「言語の人間形成の基盤ととらえ、母語である日本語の概要を学ぶ。また、国際交流に関わる仕事に従事する者あるは中学校・高校の国語科教員、外国人に対する日本語教師として理解しておくべき日本語の概要を学ぶ。」となる。ただし、シラバスの入力ミスで、総合人間形成課程の方にも、学校教育と同じ文言が入ってしまった。これは初年度からの重大なミスであった。深く反省している。

（２）到達目標

こちらは共通する以下の３点を挙げた。

①母語としての日本語を客観的に見直し、自覚的にとらえられるようになる。

②言語の本質と日本語の特徴について、学んだ基本的な知識を他者（学習者）に説明できる。

③日本語の特徴、あるいは言語の構造について、さらに深く学んでみたいと思うようになる。

２．受講生数

学校教育教員養成課程２６名（うち国語１５名）、障害児教育教員養成課程１名。

総合人間形成課程４９名（国際理解教育１６名、人間社会デザイン１７名、情報教育１０名、生活環境６名）、情報文化課程３名（うち１名科目等履修生）、スポーツ健康科学課程１名。

２７名と５３名で、合計８０名。

３．学生の評価

学生アンケートの結果（回収数６４名、教員養成２１名、総合人間形成など４０名、不明３名）

①最も印象に残ったこと（複数回答あり）

「を」の地域差・・・・・・・・・・３３名
その他発音・アクセント・・・・・１４名
漢字仮名の成立・役割・・・・・・・８名
その他・・・・・・・・・・・・・・・８名
無回答・・・・・・・・・・・・・・１３名

★課程による差はほとんど認められない。

②日本語への興味・関心

かなり高まった・・・・・・・・・・３４名
少しは高まった・・・・・・・・・・２７名
ほとんど高まらなかった・・・・・・１名

	学校教員等	総合人間等
かなり高まった	１６名	１８名
少しは高まった	５名	２２名

	国際理解	その他
かなり高まった	９名	９名
少しは高まった	５名	１７名

③教師になったとき役立ちそうなこと

いくつもあった・・・・・・・・・・３２名
少しはあった・・・・・・・・・・・２７名
ほとんどなかった・・・・・・・・・・０名
無回答・・・・・・・・・・・・・・・５名

	学校等	国際	その他
いくつもあった	１５名	９名	７名
少しはあった	６名	５名	１５名
無回答	０名	０名	４名

	教員志望	未定不志望
その他で いくつもあった	３名	４名
少しはあった	１名	１４名
無回答	０名	４名

④改善点（複数回答あり）

内容が難しかった・・・・・・・・・７名
話しが速すぎる・・・・・・・・・・４名
プリントの改善・・・・・・・・・・３名
時間配分・時間不足・・・・・・・・２名
復習ができない・・・・・・・・・・２名
板書してほしい・・・・・・・・・・１名
その他・・・・・・・・・・・・・・７名
特にない・・・・・・・・・・・・・９名
無回答・・・・・・・・・・・・・・３２名

４．自己評価

昨年度までのアンケートをほぼそのまま使用してしまったので、総合人間形成課程の必修科目としてふさわしいか否かについて直接たずねる項目がなく、結果から推測するしかない。大きな反省点である。「生きる上で役に立ちそうなことはあったか」とか、「課程にとって必要だと思うか」といった項目を次年度は入れたい。

アンケートの①の「最も印象に残ったことは」という問いには、本年度も「を」が圧倒的支持を得た。いろいろな事柄を取り上げたことからするともっとバラエティがあってほしかった。しかし、愛媛県では「ｗｏ」と発音し、近隣の県では「ｏ」と発音することをはじめて知った驚きは、自らを省みる機会となったことは確かで、学問の入門として悪くはない。受講生の中には、「家族とこのことを話題にした」というコメントもあった。

①のその他では、母語の発音に自覚的になったこと、漢字と仮名の役割分担、日本語表記の豊かさなど、いずれもこれまで気づかなかったために印象に残ったようで、母語・母方言とは無意識のうちに習得し、構造・特性について無自覚であることを伝えられたのはよかった。

その一方で、項目①が無回答・無記入の受講生が１３名もいたことはショックである。回答の時間がやや短くなってしまったが、ここが無記入では後の項目の信憑性にも関わる。

アンケート②は、日本語への興味関心の高まりをたずねたが、日本語・言語に日頃から興味を持っている専修・コースの受講生の反応がよかった。総合人間形成課程では、国際理解教育コース以外の学生に興味・関心が「かなり高まった」の率が低い。特に情報教育コースが低い。ただし、「ほとんど高まらなかった」と回答したものは受講生で１名だけである（課程未記入）から、回答者ほぼ全員の興味・関心を高めたとはいえる。それが人間形成の基盤としての母語というところまで、意識されたかどうか。やはり、日頃、言語に興味が薄い学生にこそ、インパクトを与えられる講義でなければ十分だとはいえないのだろう。

アンケート③は、まず「教員を目指しているか」をたずねた上で、「役に立ちそうなことはあったか」、「それはどんなことか」（なかった場合は「採り上げてほしかったこと」を記入するよう指示）をたずねた。

国語教員、日本語教師を目指す者には役に立つことばかりを話したつもりであるから、いい回答があって当たり前である。小学校教員、英語教員もほぼ同様である。今回、総合人間形成課程で社会、理科の教員を目指す４名のうち３名が役に立つことが「いくつもあった」と回答してくれたのは収穫だった。

アンケート④の改善点は、なかなか厳しい。「内容が難しかった」が７名もあったが、「面白かった」「楽しかった」とのコメントもあった。①の回答には、「前期とった科目で一番面白かった」、「先生が楽しそうだった」もあった。改善点の「話しが速すぎる」（４名）などをあわせて総合的に判断すると、私自身がハイテンションになって、自己陶酔の中でしゃべり続けていた、という姿が見えてくる。それに乗ってこられた受講生は高く評価し、乗り切れなかった学生はさめている。この点をどう修正できるか、自分の持ち味にも関わり、難問かもしれない。

工夫したプリントだが、一部には不評だった。特に、最も熱心な数名から、プリントに記入したものを提出してしまっては復習ができないという指摘があった。他方で、毎週、プリントにコメントしてくれ、記入内容までチェックしてくれたのはありがたかったという記述もあった。ここをどう改善するか、これも次年度への課題である。

プリントは板書を少なくするために作成している。音声記号など、板書では正確に写せないからである。しかし、板書の希望もあった。板書すべきは何か、再吟味したい。

目的の異なる二つの「日本語概説」を一緒に開講した訳だが、分けるべきだとの結論には至らなかった。母語への関心、言語のしくみについての発見・理解、それらは両者に共通するものである。平素、言語に興味を持っていない学生のことを常に念頭に置き、独りよがりにならないように注意しつつ、総合人間形成課程の必修科目としてふさわしい科目と自他とも認められるよう改善に努めたい。